

第4回

観光ガイド育成検定試験

【中級問題】

平成22年8月28日

解答版

注意

1. 開始の合図があるまでは、答案用紙を開かないでください。
2. 開始後30分が過ぎる前に会場を退出することはできません。

次の1から7までのテーマに関する文章を読んで、【1】～【45】の番号の設問に該当する答をひとつだけ選んで○をつけるか、もしくは()の中に当てはまる言葉を記入してください。回答用紙は、別紙になっています。

【1：開拓以前】

羊蹄山麓7町村の開拓の歴史を知る上で、先住民族アイヌの生産様式の理解は重要なポイントとなります。この地域のアイヌは、尻別川でのサケ漁を重要な生業としていました。尻別川の河口【1】磯谷地区には、17世紀中ごろから和人による場所請けの交易拠点が設けられていたことから、アイヌと和人の交易が進み、イソヤアイヌの中心的な集落が形成されていました。しかし、交易などにおける和人とアイヌの不平等交易をめぐる利害の対立は、1669年の【2】シャクシャインの乱において武力衝突に発展し、20名の死者が出たことからもその深刻さがうかがい知れます。また、18世紀に入ると、【1】磯谷地区は、尻別川流域で【3】エゾマツの伐採事業を進めた飛騨屋久兵衛の拠点としても発展しました。尻別川流域各地で伐採された【3】エゾマツなどは、激流ポイントを超えて河口まで流送するのが容易ではないことから、流域の途中から黒松内や余市、雷電などを經由して【1】磯谷場所まで陸送する山道も切り開かれ、馬で搬出されるようになりました。このように、【1】磯谷地区は漁業だけでなく、林業や自給程度の農業も行われるなど、当時の産業の集積拠点として発展し始めていたのです。このような形で産業の集積が始まっていた蝦夷を領土として確保するため、地当時蝦夷地への進出を目論んでいたロシアに対抗して、安政6年、幕府は庄内藩に【1】磯谷地区の警衛を命じたのでした。

【1】磯谷地区のこのような歴史を背景として、明治以前のある時期まで、尻別川の流域全体がイソヤアイヌの漁業区でした。しかし、流域の各所にアイヌでも越えがたい激流ポイント（ブイラ）があったことから、そのポイントを境に漁区は大きく3つに分断された状態となっていました。河口付近の漁業区はそのままイソヤアイヌの漁業区ですが、中流域に当たる倶知安の支流ソウスケ川合流付近は、季節になると岩内からサケ漁のためこの地に入ってきたイワナイアイヌの漁業区となり、上流域喜茂別のルサンあたりは、虻田方面から通ってきたアブタアイヌや有珠からのウスアイヌの漁業区となりました。この3箇所は、その後【4】松浦武四郎の【5】丁巳（安政4年）の調査の際にも、尻別川に接近する際の3つの入り口となったのです。初めに【1】磯谷から、次いで岩内からソウスケに入った【4】松浦武四郎は、そこから尻別川全体に調査を進めることは出来ず、結局、アブタアイヌの通い道に沿ってルサン付近で尻別川に入ることで、上流と下流それぞれに探索を進めることが出来たのでした。アイヌの3つのサケの道が、【4】松浦武四郎の3つの探索進入経路となり、さらにこの3つの経路は、その後、開拓入植者の主な入地ルートとしても活用されることとなります。裏日本からの入植者は、主に日本海岸沿いに船で北上して磯谷地区へ入地します。また倶知安地区へ入植者は、主に仁木、余市、岩内方面から入地し、その後ニセコや京極へと広がりました。そして留寿都、喜茂別、真狩へ入植者は、虻田、有珠から洞爺を經由し入地しています。後年、道路や鉄道など内陸の交通網が発達するにつれて、入植ルートは交通網を利用する形に変化していきませんが、明治初期の開拓当初は、サケ漁や山野の獣猟に使われたアイヌの道を利用した入植ルートが多かったのです。

【2：幕末余韻の時代】

榎本武揚らによる函館戦争が終わった明治2年、開拓使が設置され、【4】松浦武四郎によって蝦夷地が「北加伊道」即ち北海道と命名されることで、北海道開拓の最初の仕組みが動き出しました。その時点では北海道開拓の本拠地（【6】本府）がまだ札幌と確定されておらず、確定されたのは開拓の対象エリアに樺太を含めることを断念した明治4年のことです。開拓使は、これまで海岸線沿いの各地に点在し経済的なまとまりを形成していた「【7】場所」制度を廃止し、そのエリアの多くを「郡」として再編し、郡ごとに「諸藩分治」と称される仕組みを導入しました。羊蹄山麓は大きく磯谷場所と虻田場所に分かれていたことから、磯谷郡と虻田郡が誕生します。

諸藩分治という制度は、明治維新によって地域経営が困難になった諸藩に対し、北海道内に藩の領地経営を認めるというもので、いわば藩をまるごと北海道に移住させて、旧藩士を開拓の担い手にしようという構想でした。磯谷郡には米沢藩と五島家、虻田郡には庄内藩（大泉藩）が進出します。しかし、武士階級にとって、未開の大地で自らクワを振るうというのは大変なことです。明治政府の意向に従って北海道の経営に手を染めたものの、諸藩のほとんどは早々に限界を露呈します。例外的に定着したのは、伊達紋別の仙台藩【8】亘理士族、当別の仙台藩岩出山士族、静内の稲田藩でした。この諸藩分治制度は、廃藩置が行われた翌年の明治5年には廃止され、北海道全土が開拓使に編入され、定住できた3つの藩士にあっても、多くは武士から平民に降格され、一般の移住農民に準じた扱いを受けることになりました。

諸藩分治の時代に、この地域の開拓にとって大きな意味があったことの一つとして、【9】本願寺道路が開削され、その沿線に【10】駅通が創設されたことが挙げられます。それまで徳川幕府と関係の深かった【9】本願寺宗派が明治政府と関係の改善を図るうえで取り組んだ事業が、函館から札幌までの内陸道路の開削工事です。特に、虻田から札幌までのコースは、【4】松浦武四郎の【5】丁巳（安政4年）の調査ルートを辿ったもので、現在の【11】国道230号の原型とも言えるものです。開削工事には、【9】本願寺の僧侶だけでなく、信者、アイヌ、出稼ぎの和人、伊達に移住してきた【8】亘理士族たちも参加しました。明治3年の着工から1年半後の明治4年に竣工しますが、竣工後、開拓使長官東久世通禧、参議副島種臣ら政府の高官が、現地検分を行うため札幌から定山溪、中山峠を通過して伊達まで馬で踏破し、出迎えた伊達邦成や田沼顕允らに、【9】本願寺道路の中継地点として【10】駅通を開設するよう指示します。これを受けて明治4年、伊達の【8】亘理士族阿部嘉左衛門ら3家族が【12】喜茂別の相川あたりに入地してはじめて【10】駅通を設け、【12】喜茂別の歴史の幕開けとなります。【9】本願寺道路は峠越えの難所など不利な条件があったことから、その後さほど利用されずに荒廃し、明治5年から開削工事が始まった千歳、苫小牧経由の札幌新道に、幹線としての主役の座を譲ります。また同年、諸藩分治制度が廃止されたことで、行政区として新たに戸長役場「村」が設置され、既に和人の入植が進んでいた尻別川河口の【1】磯谷地区に【13】尻別村が設置されました。

【3：【14】永年社戦略の時代】

諸藩分治を廃止した開拓使は、明治5年、開拓を進めるための新たな制度を制定しました。これは、北海道の開墾を希望する者に土地を安く分譲し、開墾成功までの一定期間は税を免除するという優遇制度でした。しかし、結果的に投機的な土地購入が一定程度進んだだけで、購入した大地を開墾するような本来の狙いに即した開拓はあまり進みませんでした。羊蹄山麓では、この制度が廃止される明治15年ま

での間目立った開拓の動きはなく、【13】尻別村で漁業関係者などによる土地開墾がわずかに進められた程度でした。むしろこの時期は、開拓使ではなく、伊達に入植した【8】亘理士族が創設した【14】「永年社」による様々な産業振興策の影響が、羊蹄山麓にも波及して来た時代であったと言えます。

諸藩分治制度を廃止し移住士族の身分を平民に降格したことによって、伊達に移住してきた【8】亘理士族の誇りと開拓の意欲は大いに損なわれました。数少ない開拓優良事例の一つが、崩壊しかねない危機を迎えたのです。そこで開拓使は、彼らに一般移住農民と同様の経済的優遇策、すなわち金品の供与と移住経費の肩代わりを提案したのです。【8】亘理士族は、これらの経済的支援を受け入れたうえでその多くを貯蓄し、それらを原資に明治9年、【14】永年社という会社組織を創設しました。【14】永年社というのは、【8】亘理からの移住者全員を社員とし、共済、慶弔、物産振興、移出販売、船舶輸送、製糖、農場経営、牧場経営、【15】硫黄採掘などを行う、一種の共済組合でありかつ産業組合のような組織でした。この仕組みによる地域経営を名実ともに指導したのは、旧藩主である伊達邦成と家老の【16】田村顕允でした。特に入植の実質的なリーダーであった【16】田村顕允は、【14】永年社設立の直後に虻田郡内を調査する旅に出て、ニセコアンベツ川で【15】硫黄の新たな鉱脈を発見し、3年後の明治12年にはイワオヌプリの【15】硫黄鉱山採掘の権利を得て【15】硫黄を増産します。伊達とニセコ山系【15】硫黄鉱山を結ぶ道の間にあたるのが、かつて【10】駅通を置いた喜茂別相川ですので、【14】永年社創設の一環として阿部嘉左衛門に命じて【10】駅通を再建します。かつて開拓使の戦略によって明治4年に設置された喜茂別相川の【10】駅通は、【9】本願寺道路の衰退を背景として明治6年に一旦停止されていましたが、明治8年には【14】永年社による【15】硫黄鉱山開発という戦略のために再建され、羊蹄山麓に新たな開発の波が訪れるきっかけを作り出すのです。丁度この時期は、内地で政府の緊縮財政により経済のデフレ傾向が強まり、企業倒産と失業が広がったことから、北海道への移住志向が強まった時期でした。また、明治13年には、手宮 - 札幌間に道内で初めての鉄道が開通し、三笠の【17】幌内炭鉱の石炭を大量に輸送できる態勢ができ、開拓の進展にとって重要な役割を果たす交通インフラの整備が始まるなど、大きな歴史的出来事もありました。しかし開拓使は、この時期においても、開拓を促進する有効な制度を何ら打ち出すことが出来なかったのです。

【4：開拓停滞の時代】

明治15年、開拓使が廃止され、三県一局制が敷かれました。これは、北海道を三分割して札幌県、根室県、函館県を設置し、地域特性に見合った統治を目指したもので、道外の県とは違い、県議会などの自治機能はありませんでした。この三県一局時代は明治18年まで続きましたが、この間、移住者を優遇する恩典が概ね廃止されるなど、開拓促進策にはとりたてて見るべきものはありませんでした。また、市場経済の波が北海道にも押し寄せてきた時代の変化に対応できなかった【14】永年社も、明治17年には活動を事実上停止し、【15】硫黄鉱山の経営権も明治19年三井物産に譲渡しています。近代的な【15】硫黄採掘工法へと移り行く、時代の大きな境目でもあったのです。ちなみに、三井物産による近代的な【15】硫黄採掘は昭和12年まで続き、日本の産業発展を支える原動力の一つとなったのです。この時代、明治15年には、その後の羊蹄山麓7町村誕生の母村のひとつとなった【18】虻田村が誕生しています。そしてもうひとつ、この地域の歴史に大きな影響を与える出来事がありました、

明治18年、岩内の佐藤亀太郎という人が、ニセコ山系の【15】硫黄山のひとつであった【19】チセヌプリの南麓で、大湯沼を泉源とする間欠泉を発見します。当時【19】チセヌプリ南麓では、英国

ハウル社が【15】硫黄を採掘していました。佐藤は岩内の漁業資本家から資金援助を受けて湯治宿を建て、【20】馬場温泉とします。これが、その後経営者が変わって現在の湯本温泉となります。ニセコ山系で最も古いこの湯本温泉は、周辺の漁業資本家の投資により【15】硫黄鉱山を母体に誕生したもので、ニセコ山系が【15】硫黄産出の山から温泉観光の山へと変わっていく象徴的なきっかけとなりました。

【5：殖民地選定の時代】

明治19年、三県一局が廃止され、北海道庁が設置されました。北海道庁はこの年、「北海道土地払下規則」を発令しました。北海道の開拓は、この制度の発足によって大きく前進します。従来は、北海道内の土地を素地のまま、どんな特性の土地なのか十分な情報がないまま売却していましたので、売却された土地は必ずしも農業適地として開墾されたわけではなく、むしろ、原生林の木材資源や海岸の海産物などを乱獲する結果を招き、農業開拓の停滞と森林資源の枯渇を招くなどの反省材料ともなったのでした。そのような総括を踏まえて今度は、「殖民地選定5カ年計画」に基づいて道内の主要な原野を全て測量し、土壌や地質や地形、気候など土地の特性に関する情報をまとめ、どのような用途に適している土地なのか評価を加えた上で選定し、規則に則った一定の面積を入植希望者に貸し与え、所定の年限で開墾に成功した人にその土地を売り下げる、という制度を発足させました。現在の新十津川の原野を皮切りに、全道各地で測量が行われ、羊蹄山麓では【21】明治22年までに倶知安から京極、喜茂別、留寿都などの原野で測量が実施され、さらに明治27年までには、今のニセコや真狩方面の殖民地が測量されました。明治29年まで続けられた測量の結果は「殖民地選定報告」として広く一般に公示されたことから、これをもとに入植を希望する「出願」が各地から殺到したと言います。

この時代、羊蹄山麓の開拓促進に寄与するもうひとつの大きな出来事がありました。開削直後から荒廃し続けてきた【9】本願寺道路のルートを開発する道路工事が明治23年から始まり、明治27年に竣工しました。殖民地測量とほぼ時期を合わせるかのように進められたこの交通インフラの再整備によって、入植が大きく前進する下地ができたのです。【9】本願寺道路とは大部分でコースが異なるこの道路こそ、後の【11】国道230号の原型となったのでした。この「仮定県道札幌虻田間」通称【22】虻田街道の開通に合わせて、喜茂別では阿部嘉左衛門が新しい路線沿いの尻別地区に【10】駅遷を移し、この道路工事に携わった人たちの中から別の【10】駅遷を立ち上げる人たちも出てきました。殖民地選定は、道内のほぼ全ての地域で実施されました。原野の測量調査を伝え聞いた人の中から、開拓の先駆者が生まれます。【23】留寿都村（当時は虻田村）では、明治19年【24】橋口文蔵が土地の払下げを受けて米国式の機械化大規模農場を導入しますが、失敗して小作農による経営に転じ、結局明治24年に売却して、加藤農場となりました。また、殖民地選定報告で【25】倶知安原野の可能性に魅力を感じた仁木村の仁木竹吉の呼びかけに応じ、仁木、余市、岩内の同志が共同で出願の組合を作り株主を集め、【26】明治25年に山田邦吉ら15名がソウスケ川合流地点あたりに入植します。この年を、倶知安町では開基としています。しかし、倶知安からニセコにかけての一带は【27】御料林となっていたことから、土地払下げの出願は認められず、出願組合は一旦解散します。彼らの一部は、倶知安の尻別川沿いに立地していたマッチの軸木工場などで就労し、再出願のときを待ちます。そして明治27年、ニセコ方面まで含む殖民地の測量が終わり、【27】御料林が開放され官林に編入されたことで、【25】倶知安原野には様々な農場、移住団体などが入植しました。入植による定住者の増加により大きな

市街地が形成され、明治29年には、倶知安村が【18】**虻田村**から分村し、戸長役場が設置されました。現在の京極町地域を含めての分村でした。また、【27】**御料林**が解除された狩太（現ニセコ）においても、明治29年に【28】**松岡農場**が進出し、その後の大農場による開拓のはじまりとなることから、ニセコ町ではこのときを開基としています。真狩においてもマッカリ原野の区画整理に伴って個人移住者が入植し、なかでも神原弥吉らが入植した明治28年をもって真狩村の開基とされました。蘭越においても、石川県から集団入植が行われるなど、開拓は一気に進みます。また、明治20年に向洞爺に入地した旧丸亀藩士の【29】**三橋政之**は、各地の殖民地情報をもとに、自分を頼ってくる様々な人たちに適地を紹介するなど、神原弥吉らが今の真狩に入地するきっかけを作っただけでなく、明治30年の旧丸亀藩主京極高德子爵による京極農場の貸付出願にも寄与したのです。

この時代、温泉の開発も引き続き行われ、明治27年には、倶知安にはじめて入植した山田邦吉ら3名による【30】**山田温泉**の発見（営業開始は明治30年）、明治29年には磯谷地区の成田元吉による成田温泉（後の【31】**薬師温泉**）が発見されました。成田温泉も、磯谷地区の漁業資本家の資金支援により営業が行われています。

【6：入植と開拓の本格的展開の時代】

明治19年の「北海道土地払下規則」は、既に述べたように、北海道の開拓が本格的に進展する大きな原動力となりましたが、反面、深刻な課題も表面化してきました。それは、大農場が各地に出現し、少数の不在地主と大勢の小作人という構造が固定されるようになり、自作農による農業開拓があまり進展しなかったことです。貸下げ後に開墾が成功するうえで、劣悪な契約条件下で小作人が大規模に導入されたことや、開墾農地の収奪的耕作による土壌の劣化が顕著になって農業の継続性を危うくするなど、様々な問題が表面化してきたからです。

そこで、それまでの土地払下規則に替えて、明治30年「北海道国有未開地処分法」が發布されました。これは、開拓予定の土地を無償で貸付け、開拓が成功したときに無償で付与する、という制度で、付与を基本としつつ、売払、交換、貸付なども組み合わせるといって、多様で柔軟な仕組みでした。開墾が成功すればその土地は付与されるので、たとえ自己資金が乏しい農家でも自作農として自立できるだろう、と踏んだからです。しかしこの制度改変によっても、新たな大農場の出現と地主 - 小作人の関係を解消することはできませんでした。そのもっとも端的な事例として、明治30年、旧丸亀藩主京極高德子爵が貸付の出願をし、240万坪という大規模な京極農場が出現しました。この京極農場設立の年を、京極町では開基としています。

京極農場は代々優れた管理人に恵まれたことなどから安定的に発展し、農場の一部が市街地になって、明治43年には【32】**東倶知安村**として倶知安村から分村するほど発展しました。京極村と改称されるのは、昭和15年です。また、明治31年には、京極農場の開墾指導者藤村徳治が【33】**ワキカタサップ**川の上流で鉄鉱石の鉱脈を発見し、大正5年に三井鉱山がその採掘権を得て【34】**脇方鉱山**として本格的な採掘を進めるきっかけとなりました。後の大正8年に倶知安から京極まで鉄道が敷かれるようになったのも、【34】**脇方鉱山**で採掘された鉄鉱石を室蘭に輸送することを主たる目的としていましたので、羊蹄山麓の広域交通網が整備されるようになった背景として、京極農場の存在が大きかったと言えます。

大農場の成立がまちの開基となった京極町と似ているのが、大農場【28】**松岡農場**が開設された明治29年を開基としたニセコ町です。当時狩太と称されたこの地区は、【28】**松岡農場**以降も次々と大

農場が開設されました。中でも有名なのが、明治32年に開設された【35】山本農場（後の有島農場）であり、翌明治33年に開設された曾我農場です。特に【35】山本農場は、その後明治41年に【36】アメリカ留学から帰国して北大に戻った有島武郎に農場主の名義が変更され、名実ともに有島農場となりました。狩太では大農場が次々と開設されたことにより小作人の入植が進み、市街地も発展したことから、明治34年に真狩村から分村して、狩太村が誕生しました。また明治32年は、尻別村が南部蘭越地区の南尻別村と北部港地区の北尻別村に分村した年でした。蘭越町は、この分村を開基としています。ちなみに、南尻別村と北尻別村は昭和29年に再度合併して蘭越村となっています。

この時代最大の出来事は、明治37年の北海道鉄道の開通でしょう。北海道の鉄道敷設については、明治29年に制定された「北海道鉄道敷設法」が根拠となり、鉄道敷設の主要な目的は、【37】地下埋蔵資源の大量輸送と、軍事物資や軍隊の輸送に置かれていました。【17】幌内炭鉱から石炭を輸送することや、旭川第7師団の輸送経路の確保は、国家的見地から急を要する課題となっていたのです。また、このような国家的見地に基づいて函館から小樽までの幹線鉄道が開通し、各駅を拠点に【38】殖民道路も拡張されたことにより、内陸への入植・開拓は飛躍的に拡大し、その後の【40】団体入植にも大いに寄与したのです。北海道鉄道は、また羊蹄山麓の新たな観光開発にも大きな役割を果たしました。

【39】比羅夫駅に降り立った旅行者を蝦夷富士羊蹄山の登山に誘う山岳観光戦略だけでなく、蘭越、ニセコ、倶知安地区では温泉の宣伝にも力を入れました。特に、【39】比羅夫駅に近い【30】山田温泉、昆布駅に近い成田温泉、【20】馬場温泉、宮川温泉、新見温泉、そして昭和の末まで一世を風靡した青山温泉など、ニセコ山系各地の温泉地が、一気に観光の最前線に躍り出たのです。

入植・開拓が一気に進んだこの時代には、大農場など資本の導入は大きく前進したものの、不在地主と小作が増えたことや、投機的な土地漁りも横行するようになったことから、自作農向けの新たな土地は少なくなる一方でした。このままでは健全な農業開拓とは言えない、そんな閉塞感が北海道全体に広がってきた明治39年、自作農による自由な農場創造を目指した平民農場が【23】留寿都村に生まれ、また二級町村制が施行され第1回村会議員の選挙も行われました。平民農場は2年後に早くも挫折して童謡「赤い靴」の悲話を残しましたが、第1回村会議員選挙の実施はその後の地方自治制度進展の一里塚となりました。

【7：自作農創出を目指した時代】

明治41年、「北海道国有未開地処分法」が改正されました。耕作目的の居住地を特定することで不在地主化を防ぎ、自作農に対する無償貸与など支援を手厚くする内容となりました。また同年、【40】団体入植に対する優遇策の条件を緩和し、【40】団体入植がしやすくなるような措置も講じました。明治25年に30戸以上を【40】団体入植とみなす規定が定められていましたが、明治39年には20戸以上、そして41年には10戸以上、と条件が緩和されたのです。この支援策を活用して、各地で【40】団体入植が増える傾向にありました。特に規模の大きな事例として、明治41年から始まった【41】山梨団体があります。京極、倶知安、喜茂別に延べ数百戸の移住が見られ、他にも、福島団体、阿波団体、越中団体、南部団体、群馬団体などが各地で展開されました。しかしその多くは、すでに良好な農地が少なくなっていたことなどから開拓がうまくゆかず撤退していきませんが、一時的であれ地域の人口が急増したことにより、地域経済と地域社会に大きな影響を与え、各地の分村、自立の流れを加速させました。明治43年には倶知安村から【32】東倶知安村が分村（昭和15年に京極町に）、大正6年には真狩村から

喜茂別村が分村、そして大正11年真狩村から【42】**真狩別村**が分村し、現在の羊蹄山麓7町村それぞれが自立したのです。最後に残った真狩村は、大正14年に留寿都村と改称し、【42】**真狩別村**は昭和16年に真狩村と改称しています。

【40】**団体入植**が行われしかもその多くが撤退したことで、北海道への入植と開拓の時代は一段落したことになります。それは、明治の終わり頃です。この間に、ニセコ山系の温泉の開発も進みました。明治41年には岩内の新見直太郎によって新見温泉が発見され、翌明治42年には青山温泉で不老閣が営業を開始し本格的温泉旅館の幕開きとなりました。この青山温泉不楼閣を拠点に大正8年から北大スキー部の合宿が始まり、また大正10年に宮川温泉を拠点に小樽高商スキー部の合宿が始まることによって、ニセコ山系は本格的な温泉とスキー観光の曙を迎えたのでした。五色温泉も大正9年に営業が開始され、経営者の一人稲村道三郎が、倶知安からのアクセス道路を開削しています。昭和2年の紅葉谷温泉開業により、今日のニセコの温泉はほぼ出揃い、平成元年に青山温泉が廃業するまで、温泉の栄枯盛衰が続いたのです。

【8：大農場の開放が始まった時代】

明治から大正へと替わり、羊蹄山麓は、開拓殖民から経済振興の時代へと転換していきます。この大転換を象徴する二つの歴史的出来事がありました。ひとつは、大正5年に三井鉱山株式会社による【34】**脇方鉱山**の開発が始まり、大正8年に倶知安から京極まで京極軽便鉄道が開通し、翌大正9年には【34】**脇方鉱山**まで軽便鉄道が延伸されたことです。さらに昭和3年、この鉄道は喜茂別まで伸び、昭和16年には、大滝、壮瞥を經由して伊達紋別まで胆振縦貫鉄道として開通し、戦時下における鉄鉱石の需要拡大に大きく貢献したのです。昭和19年に国鉄となった【43】**胆振線**は昭和61年に廃線となり、その歴史的役割を終えています。段階を追って貫通した【43】**胆振線**の構想は、倶知安、脇方、喜茂別などの【37】**地下埋蔵資源**を室蘭まで輸送するために、経済振興と軍事的戦略を要とする国家的な視野から推進されたものでした。鉄鉱石を迎え入れる室蘭においては、鉄鉱石を銑鉄に加工し、さらに鉄鋼に製品化する一連の製鉄産業が形成されました。このような軍事的色彩を帯び始めていた国家規模の産業振興政策の中に、地域の様々な領域が巻き込まれ、昭和の戦争へと時代は急速に動いていったのです。鉄道の敷設工事現場においてはタコ部屋と称される人権無視の強制労働が行われ、尻別川に労働者の撲殺死体が浮かんだ事件もありました。

そしてもうひとつは、有島武郎による大正11年の有島農場の解放です。明治41年、父有島武の意思により大農場のオーナーとなった有島武郎は、以来、自身の思想的信念から小作農の存在に苦しみ続けていました。そして、【44】**水田灌漑溝問題**の立件をきっかけに国から圧迫を受けながらも、有島は自らが所有し経営していた全農地を、農場の小作人に無償で解放しました。しかも、単に農場を小作人個人に無償で分け与えたのではなく、小作人全員が共同で農場全体を経営することを条件に無償で譲渡したのです。【45】**「相互扶助」**を理念とする有島農場の開放は、国家により様々な干渉を受けた“許されざる開放”であった、とも言えます。しかし、有島農場の小作人たちは、有島武郎の意を受け止めて大正11年狩太共生農団利用組合を設立し、有島の理想実現に向けた第一歩を記しました。有島武郎は、翌大正12年自殺してしまいますが、自作農の推進を目指した北海道庁の開拓政策とは全く異なる理念と方法で、有島武郎は北海道開拓史の新たな地平に向けて、開拓精神そのものを解放したとも言えます。

(了)